昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一日一回發行）

主筆　江原萬里

聖書の眞理

第六十號

十月號

創刊滿五年記念號

滿五年の感謝　主筆
神の選民　江原萬里
イエス・キリスト　江原萬里
千古の神秘
處女降誕
成長
受洗
岩なる君こそ我等の立場　身邊漫筆

昭和七年（1932）十月一日發行

岩なる君こそ我等の立場

此の程帝大教授大内兵衛君が大學新聞に載せた「富士登山記」を面白く讀んだ。七合目から下界を下瞰して、脚下に湧く雲の海、其の中に立つ遠き山々、雲間に見える麓の湖、波靜かなる相模灣、三浦半島を叙した筆致は優れて名文だ。その中こう云ふ感想がある。

僕は生れて初めて見たこの高い山からの景色の雄大さに、そしてそれが限りなく變化する有樣の不思議さに、全く驚いてゐた。そして自分をも忘れて居た。といふのは、僕が驚いて見てゐるものは實のところ富士山そのものではなくして、富士山から見た雲であり、山であり、海であり、要するに富士山よりももつと大きいものであるからだ。今や僕にとつては富士山は觀照の對象ではなくなつてゐるのであり、寧ろそれは一つの立場そのものとなつてゐるのである。まことにこの立場は尊い。（中略）かくて人間にとつての課題は、有史以來パラダイスが何であるかではなくして、如何にしてそれへの途を踏み得るかであつたのも道理あることゝいはねばならない。如何にしていゝ立場をとり得るかゞ人間の背負はねばならぬいばらの道である。

我等基督者の立場は何か、マルクスでなく、資本論でなく、唯物辨證法でない。キリストであり、聖書であり、天啓である。「汝らは神に賴りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝等の智慧と義と救贖とに爲り給へり」是である。即ちキリストの立場に在り、キリストが我等に啓示し給ふ神觀、人生觀、宇宙觀に由つて我等の神を見、己を見、又我等の世界を見るのである。

神　天然は偶然に生ぜず、神之を創造し、攝理し給ふ。播かず苅らざる空の鳥を養ひ、その御許なくば一羽の雀も地に落ちない。我等の頭の髮までも皆數へらる。神は我等の生活になくてならぬものは悉く知り給ふ。神は物的生產力ではない。己を十字架に釘くる者に己が生命を與へ之を救ふ强健なる愛イエスの父に在し給ふ。

我等　は此のキリストに由りて此の神の子とせられる「もろもろの人を照らす眞の光ありて世にきたれり。……その名を信ぜし者には、神の子となるの權をあたへ給へり。斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、たゞ神によりて生れしなり」。然らば彼を信じない者はどうなる。「御子に從はぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止まるなり」。神の此れ程の愛を信じない者に大いなる刑罰、死があるのは當然である。

世界　はやがて一新せられる。やがてキリストの再臨の時新天新地が出現する。其の時我等キリストに在る者は甦さる。啻に靈魂が義に由つて永遠に輝くのみでない。榮光不朽の體を纏ふ。

此の雄大なる神觀、人生觀、世界觀はキリストに在つて生くる者のみが有ち得る。此の立場よりせずば阿片の陶醉である。

天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者にかくして嬰兒に顯はし給へり。子を知る者は父の外になく、父を知る者は子また子の欲するまゝに顯はすところの者の外になし。

聖書之眞理
昭和七年十月一日發行
第六十號

本誌滿五年の感謝

本誌號を重ぬること六十、今月を以て創刊以來滿五周年を迎ふ。主筆たる私にとつては眞に大なる感謝である。

私が本誌の創刊を思立つや、當時私に所謂地盤なるものは少しもなかつた。私は多くの知人を有せず、殊に基督者の間に其の名知られず、何處の馬骨かと思はるゝ者が、敢て獨力基督教雜誌を刊行したのである。其の始め友人は之を諫止し、之を發行するや、多くの學者たちは嘲笑罵詈し、爲めに東京帝國大學の食堂は二日以上に亘つて賑はつたとのことである。かく學者の嘲笑を以て創められた本誌は、最近主筆と信仰を同じくし、最も親しかるべき人々から、多くの誹謗を蒙つて居る。夫にも拘はらず、本誌は獨特の地歩を占むるに至つた。是大なる感謝でなくて何ぞや。

私の感謝の第二は、本誌は主筆の健康虚弱なるに拘はらず、一回も休刊したことがない事である。創刊以來二回の大患に由り私は殆ど癈物となつた。此の數年足一歩も鍾倉を出でず、一日三四時間の勞働をなすのみ。雜誌刊行に必要なる新知識を集めることを得ず、外界との交渉は極度に制限せられた。加之虚弱は暗黑、憂鬱、焦慮、失望を伴ひ易ひ。どうして此等に打ち克つて、雜誌を以て天下に自己の所信の正邪を問ひ得やう。

大なる感謝はこゝに在る、神が主筆の弱きに由つて主筆を用る給ふたのである。内には、私の心をキリストに由つて慰め、平安と歡喜と希望とを供して之を語らしめ給ふた。而して外には、數人の親友を備え給ひ、弱き主筆を温き同情の言、なくてならぬ物資と援助とを以て勵ましめ、遂に今日に至つたのである。

若し本誌に存在の意義あらば、此の事を證するに在る。

限りなき感謝は神に、而して此等の友にある。

神の選民（下）

江原萬里

預言者

かく彼等の歴史は神の攝理を啓示する。神が此の民を選び、保護し、彼等をエジプトから救ひ出し、之にカナンの地を與へ、周圍の諸族の侵略を防ぎ、彼等に國民生活の安泰と幸福とを授け給ふた事、然るに彼等が神の聖意に服從せず、邪淫不德の偶像を祀つて、永く之に惑溺した時、神は正義を以て此の民を罰し、遂に國を滅ぼし給ふた事、然かも彼等の悲慘なる亡命中、神は彼等を顧み、其の罪を赦し、更らに大なる光榮を未來に約束し給ふた事、彼等は此の神を信じて故國に歸還し得、彼等の中に顯るべき救世主の出現を待ち望んだ事、而して救主は遂に彼等の中から出現し給ふた事を示す。此の見地よりせずば彼等の歴史は全く不可解である。

神は實に此の民を以て我等に神の存在と、その攝理とを明示し給ふた。加之、此の民の此の無比なる歴史の進行中、殊に彼等の國が滅びやうとする紀元前第八世紀から第五世紀に亘る重大時期に際し、

一　神が己を召し、己に命じて、神が此の民の上に爲さんとし給ふことを前以て預言せしめ給ふのであると確信する預言者が踵を衝いで輩出したこと、

二　此等の預言者たちは其の時代を異にし、周圍の事情を異にし、あまつさへ各自の生立ちと性格とを異にし乍ら、其の預言は不思議に連絡あり、前後相一貫して、統一あり、宛かも一人の意志が語る如く見えるのみならず、其の預言の内容は歴史の進行につれ益々深刻となり、イスラエルの民の存在の理由が明白となつたこと、

三　彼等の預言は瑣事については多少の相違は生じたが、重大事件については事前に之を語つて誤らず、其の預言に由つて始めて事件の意義が明瞭に理解されること。

此の民の中にかくの如き預言者の輩出した事程、神の存在と攝理とを知らしめるものはない。

預言者の確信

實に此等の預言者の先見と確信とは我等の驚嘆である。我等は復雜極まりなき世相、諸原因錯綜する歴史を見て、其の背後に在る眞の原因を見出すこと難く、將來を預言する事は出來ない。

然るに彼等は明白に世相の趨勢を先視し、將來を先言した。其の預言の正しいことの確信の窄固たる、眼前の事象が丁度彼等の預言と正反對の方向に向ふやうに見えた時すら、毫も自己の言を訂正しやうとしなかつた。一時國は榮え強大に向ふやうに見えた時にも、國滅ぶと叫び、社會一般の輿論は神の守護を信じ、國康しと云つた時、獨り彼等は罪惡に對する審判を先視した。又國將さに滅びんとして人々皆周章狼狽した時、此等の預言者は亡國の彼岸に神の御救のあることを預言した。而して彼等の預言は後の歴史に由つて正確を證明された。

此の確信、此の識見はそも何處から來たか。彼等は何の狐疑するところなく答へる。神が直接之を彼等に啓示し給ふたのであると。

アモス對へてアマジヤに言けるは、我は（職業的）預言者にあらず、預言者の子にも非ず、我は牧者なり、桑の樹を作る者なり。然るにエホバ羊に從ふ所より我を取り、往きて我民イスラエルに預言せよとエホバ宣へり。今エホバの言を聽け、汝は言ふ、イスラエルにむかひて預言する勿れ……と。是故にエホバかく言ひ給ふ、……汝は穢れたる地に死に、イスラエルは擄へられゆきて、その國を離れん（アモス書七・一四以下）。

「エホバかく言ひ給ふ」。是が彼等の預言の根據であつた。如何なる反駁、如何なる迫害も、如何ともなし得ない根據であつた。

ヒユームは神の存在を疑ひ、人間は之を悟り得ずと云ひ、カントは我等の純粹理性を以てしては只之を推定し得るのみ、決して之を認識する事は出來ないと論じた。若し此の認識論を預言者たちの前に、然り、イエスの御前にて述べて見よ。「愚者よ」と一笑さるのみであらう。

現代人は我等の認識に限界のあることを餘りに氣にする。されど人間の能力は變化し、發達するものである。

其の昔、舌は只食のためにあつた。誰か其の時デモステネスの雄辯を思つたか。昔男女の本能は只子孫の存續繁殖のためにあつた。誰か其の時、之よりして清淨なる家庭、献身的愛が生ずることを考へたか。我等の人格には測り知れないものがある。神が之を啓き給ふ時、驚くべき能力が顯はれるのである。

神が預言者の心を啓いたのである。故に彼等は冷靜なる理性の判斷力を失ふことなくして、然かも人間一般の認識の限界を遙かに越えて、神の御聲を聞き、神を知つた。彼等はカントのやうに之を推斷したのではない。又其の御聲は「自由なる人格者が、自己に對して與へた自律」でもない。絶對他者なる神が彼等に臨み、其の心を啓き、直接之に物言ひ給ふたのである。

預言者の人格と預言の本質

預言者は神に召され、神に强ゐられて預言した。彼等は同胞の中に在つて自己の優越を誇るため、又自己を偉大ならしめるために、自ら進んで預言者となつた野心家ではない。エレミヤの如きは、いやいや預言したのである。

然かも彼等の宗教と道德觀念とは遙かに當時の社會的水準を拔いた。それは勿論、當時の社會の中から生れ出なかつた。神が直接彼等に示し給ふたのである。實に彼等は神に捉へられた、「神に醉える人」であつた。その熱烈なる感情、强健なる意志、明敏なる智能、比類なき社會認識、これ悉く先づ神に由つて一變せしめられた人格から產れた。彼等は只單に「野に叫ぶ聲」ではなかつた。言即ち人格であつた。直接神に接して一變した彼等の全人格の奥底から發した生活躍動の聲、それが預言であつた。

されば預言者の預言は、決して歷史の趨勢を科學的に觀察して歸納した、所謂歷史哲學、某しの史觀と異なる。又珍奇な現象を見て、之を超自然力と推測するやうな淺薄なものではない。神が預言者の口を以て我等に語り給ふた御聲であつた。預言者の人格が神に由つて新にせられ、神の人格に近づき、其の嚴正なる正義を知り、又我等の中に行ひ給はんとする聖意の啓示を受けたればこそ、彼等は史的事件を未發に預言し、發生と共に其の意味を說明することが出來たのである。

誰か私自身の將來を預言し得る者ぞ。それは私の過去の經歷を能く知つた者ではない。現在の私の心、否、私自身の中心に座を占め給ふキリストを知つた者である。私の最奥の自己、私の救主を知つて、私の將來の運命を預言し得る。其の如く、歴史の本源たる神を知つて始めて人類の歴史は理解せられるのである。我等各自の生涯と全人類の歴史の歸趨とは、神之を握り給ふ。而して神に由つて新にせられた者が神を知り、之を預言し得るのである。預言者とはかやうな人であつた。

完全なる人格の出現

人の人格が天の父の完全に近づけば近く程、益々人は神を知り、且つ神の聖意を己に顯はすのである。何となれば神は絶對に、且つ永遠に、完全なる人格に在し、而して我等は歴史の中に在りて、不完全から完全に向ふやうに造られた人格であるからである。我等が神に近づくこと、即ち、我等の人格が完全となる道に横はつて、之を妨げるものは、我等の罪である。神自ら我等の罪を除き給ふことなくば、我等は神に近づき得ない。預言者は自ら進んで神の預言者となつたのではない。神が彼等を召し、その人格を新にし給ふたればこそ、神の聖意を知り得たのである。

かくて彼等に啓示せられた神の最大の預言は、將來神は己を完全に顯はす救世主を世に遣り、曾にイスラエルの罪を贖ひ給ふのみでなく、全世界の民の上に神の國を建設し給ふと云ふことであつた。

救世主は神の代表者にして、又全人類の王、且つ神と人との間を執成す大祭司たることを要する。即ち完全なる人にして、神の人格を地上に完全に顯はすものたるを要し、且つ人の罪を完全に除く者であらねばならない。如何にして人の罪は之を贖ひ得るか。救主の業の預言はイザヤ書第五十三章の「エホバの僕」に至つて最高頂に達した。而して後凡そ四百年、ナザレのイエスは此の預言の完成者として出現し給ふたのである。彼は完全なる人格を有し給ふた。眞に神が人となり給へるものであつた。「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ傳一四、九）とは

彼の驚くべき御言であつた。

神、むかしは預言者たちにより多くに分ち、多くの方法をもて、先祖たちに語り給ひしが、この末の世には御子によりて我等に語り給へり。御子は神の榮光のかゞやき、神の本質の像にして己が權能の言をもて萬の物を保ち給ふ（ヘブル書一・三）。

かくてイエスは世に現はれ給ふた。

あゝ、心の中に嘆きて暗中に神を求めつゝあるものよ、神を求めて得ず耐え難き心の苦しみにもがきつゝ、己が全生命の欲求の滿されん事を願ふものよ。イエスに來れ。世の望消えはて、何の援もなく、只獨り滅亡の邊に彷徨ふ者よ、暗黑の中に眞の光明を與へ、そこから君を救ひ出し給ふ眞の救主はナザレのイエスとなつて遂に現はれ給ふたのである。

以上私は我等の求めて止まない神は我等に知り得べく、又知らねばならないだけの御意の全部を、悉く且つ完全に、その御子に由つて我等各自に示し給ふまでに、漸進的に自現をなし給ふたことを述べた。天然に、歴史に、又良心に、而して特に神に選ばれて世に神を證しするものとせられたイスラエルの民族の歴史に、且つその民族の良心たる預言者に、最後に神人となり、イエスとして顯はれ給ふた事を語つた。

此の順序は畢竟我等各自の信仰的生涯の內的經驗ではなかつたか。其の初め我等が未だ信仰を得ない以前の生涯に於て、既に天然は我等に神の御業を示し、歴史はその御導を語り、我等の良心は神の御聲をきいた。然るに神に召され、神から特に信仰を與へられた後の我等の生活は、イスラエルの歴史に似、又その意味は預言者の預言の如くであり、而して後キリスト直接我等に顯はれ給ひ、彼我等の生命となつて眞の神を知り、平安と歡喜と希望とを感ずるに至つたのではなかつたか。

イエス・キリスト（一）

江原萬里

一　千古の神秘

人々は我を誰と思ふか（可傳八・二七）

私は人は生れ乍ら宗教心があり、神を求め慕ふ熱烈な心がある事を述べた。次で、神も亦人を求め、之に己を顯はさんとする熱心のあり給ふ事を述べた。而して神は己を人に知らしめ、人類の救濟と完成とのため、特にイスラエルの民を選び、其の歴史に神の攝理を示し、預言者を召して、之をして其の御意を語らしめ、天地を創造し、人類を支配し給ふ唯一の神の存在とその御性格とを明に啓示し給ふたのである。

如何にして預言者が、神の存在とその聖意とを明に知り得たか。それは彼等が神に捉へられ、其の人格が聖化されて向上し、神の御性格に近似するに至つたからである。人類の人格の向上、其の良心の敏感、智慧の發達こそ神を知る唯一の道である。

此等の預言者たちは其の人格が聖化され、高められ、神の御性格に近似して、神の御意を知つた。神は人を罪から救ひ、地上に美はしき神の御國を出現せしめ給ふ御意のあること、而してそのために、神の本質より出でて完全なる人格を有つ神の子が此の地に顯はれ、罪の赦と新生命の賦與を得させ、神の此の大經綸を成就し給ふ日の將來することを預言したのである。而して此の預言に基いてナザレのイエスは出現し給ふた。彼を見て、我等は神につき人の知り得べき限り、神の全貌を拜し得る。而して彼を我が物として、我等は人間として有ち得る凡ての理想を達成せしめられる。彼こそは「我を見し者は父を見しなり」と言ひ給ふた者である。

まことに、イエスの地上出現には長年月の準備があつた。神に於て又人に於て。彼は「時滿つるに及びては、神その獨子を遣し」（ガラテヤ書四・四）給へる者であつた。然かも彼は全く我等と同じ血肉を具有する正眞の人間として此の地に生れ給ふた。神の自現は天然に、人類全

體の歴史に、更に選民イスラエルの歴史に、就中「選民の選民」たる預言者たちに漸次明かとなり、遂に神の子の出現となつたのである。然かも他方、天然は人類を生み、人類は神を知る宗教天才を生み、其の最も勝れたる天才預言者に至つて神の御性格に近似し、遂にナザレのイエスとなつて、永遠の「言」なる神を宿し奉る幕屋となつたのである。天は地に降下し、地は天に向上して、イエスに於て遂に二者相一致した。

それ故イエスは完全なる人であり給ふた。然かも彼には普通一般の人の有たない何者かを其の中に有ち給ふた。彼に附き從つた弟子たちは遂にそれを認めずには居られなかつた。ハルナックは其の名著教理史で云つた

人類の歴史中、之に類する事が他にあるか。嘗てその師と共に飲食した者等が、彼を崇め、嘗に彼を神の啓示者としたのみではない。世の教主、且つ審判主、彼等の存在の生命力とし、ユダヤ人も、異邦人も、ギリシヤ人も、夷も、賢者も、愚者も、皆彼等と一緒になつて、いづれも我等は此の一人の人の充ち足れる中から恩惠に恩惠を受けたと告白した。かゝる事が他の何處に在る。

ユダヤ人はモーセの律法を尊信し、嚴格なる一神教を奉じ、護教のためには死を辭しない者である。然るに其等の人々が敢てイエスを主、即ちエホバと等しき「もろもろの名にまさる名」（ピリピ書二・九）とし、父なる神の外に神として拜するに至つたのである。イエスの中にそれに相應はしき神性なくして、どうして彼等が死を冒して此の信仰を告白し得やうか。

爾來千九百年の世界歴史は一面イエス・キリストを信ずる信仰史であつた。曆は彼の生誕を紀元とし、文明は直接間接、彼に對する信仰を基礎として發達した。ナザレのイエスはそも如何なる人であり給ひしか、之を探つて今に至るも尙我等の興味は盡きず、我等の全生涯は之に惹きつけられるのである。然かも之を究めて我等の智慧の如何に淺く、我等の頭腦の如何に低きを感ずる。イエスの人格こそ久遠の神秘である。

由來基督教はアリマテヤのヨセフの空虛になつた墓か

ら生れ出たと稱へられる。其の事は瓢箪から駒が出たと云ふのではない。明に仕舞つて置いたイエスの屍が甦り、墓がからつぽになつた事を云ふのである。イエスは十字架上に死し、葬られ、而して三日目に甦り給ふた。それは只イエスの靈魂が生き還へつたのではない。その屍までが復活したのである。そして明に弟子たちの目のあたりに顯はれ給ふた。

ケパに現はれ、後十二弟子に現はれ給ひ……次に五百人以上の兄弟に同時にあらはれ給へり。その中には既に眠りたる者もあれど、多くは今なほ世にあり、次にヤコブに現はれ、次にすべての使徒に現はれ、最終に月足らぬ者のごとき我にも現はれ給へり（コリント前書一五・五以下）

之を見て、イエス死して意氣沮衰した弟子たちは勇氣を振ひ起したのである。ナザレのイエスこそは、彼等が神の約束に由つて多年その出現を待ちに待ちたるメシヤであり、神の國の建設者、世の審判主、然り、神の子、彼の再臨に由つて全人類の希望は達成せらると確信し、翻然身命を献げ、死を怖れず苦難を事とせず、復活の證人となり、福音を全世界に宣傳へたのである。之が基督教の起原であつた。

使徒たちの熱烈なる傳道の結果、キリストに對する信仰は世に弘がり、福音は燎原の火の如く盛に傳播した。それと同時に、イエスは神であり給ふとの信念も亦次第に強くなつて來た。グノスチック（聖智派）の人々專ら之を唱道し、ナザレのイエスの地上の御生涯は事實人間の生涯でなくして、神の假現に過ぎなかつたと云ひ、或は、神はイエスと云はれる人間の中に假りに宿り給ひ、イエスが十字架上に死する少し前、變貌の山にて彼から離れ、天に歸へり給ふたのであると唱へた。此の異端の漸く萠しやうとする頃、ヨハネ第一書はその反駁として書かれた。イエスは明に人であり、然かも同時に神の子であり給ふた事を證した。

太初より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら視て手に觸りし所のもの、即ち生命の言につきて、――この生命すでに顯れ、わ

れら之を見て證をなし、その曾て父と偕に在して今われらに顯れ給へる永遠の生命を汝らに告ぐ――我らの見しところ、聞きし所を汝らに告ぐ（一・一以下）

眼にて親しく其の御姿を見、つらつら視、耳にて親しく其の御教を聞き、且つ我等の手直接彼の肉體に觸れ、彼の手は嘗て我等の足を洗ひ給ふたこともあつた、正眞正銘の人而してそれは世の創造前、太初から有りし所の永遠の生命、これがイエスであり給ふと云ふのである。

イエスは完全なる神であり給ひ、又完全なる人であり給ふたと云ふ信念を最も簡明なる語を以て發表したのは紀元四百五十一年のカルセドンの會議の決議である。之は當時歐洲に於ける基督教民の信仰を端的に表はしたものであつた。

神として完全、同時に人として完全なる、眞の神、而して同時に眞の人！神性に就いては父と同質にして、人間性に就いては、罪を外にしては凡ての事我等と同質同性にて顯はれ給ひ、然かも混亂なく、轉換なく、不可分、不可別……一人格中に保存結合せられ、二人格に分離せられることなき……神、言、而して主イエス、キリスト。

如何にして一人格中に神性と人性とが圓滿無凝に結合せられて存在し得るか、如何にして同時に人が神であり、神と人とが一人格であつて二人格でないか、此の決議は之を說明しない。

當時イエスは神であり給ふたとは、何人も之を信ずるに困難を感ぜず、イエスが人であり給ふたと云ふ事の方が信ずるに困難であつた。然るに十八世紀以來、自然科學が發達し來り、それに影響せられて合理主義哲學が一般に盛となり、凡て神秘的なるものは一切虛妄として排斥する傾向が生じた。そのためイエスの神性は次第に信ずる事困難となり、現代の我等の間に於ては、何人もイエスは歷史的人物であつた事を疑ふ者はないが、彼の神性は容易に理解せられず、之を祖先が信じたやうに無條件に受容れる者は甚だ稀となつた。パウル、カイムの如き大學者の研究の結果は、イエスを神の子とせず、彼を以て宗教的大偉人と認めること以上に出でない。シユト

ラウス、ルナンの如きは、イエスは罪なき完全なる人であり給ふたと云ふことすら否認する。彼等はイエスの奇蹟を否認し、之を以てイエスの手品とする。

イエスは我等と同樣の人であり、只それだけであつたか。今或る者の說くやうに、彼は近所の熊公八公と同じやうな凡人であり、千數百年の永年月信じ來た彼の神性は一つの虛妄に過ぎないか。我等が彼を見て神を見、彼を信じて神を信じ、彼の罪の贖ひを以て神の赦しと感ずるのは大なる誤謬であるか、イエスの愛に由つて我等の心の中に湧き出でる平安、歡喜、永遠の榮光の希望は只阿片の陶醉に過ぎないか。

若しイエスは神が人となりて地上に顯はれ、神自ら人として我等の罪のため苦しみてその呪詛を除き給ふたものでなければ、我等の信仰は空虛である。我等はイエス、キリスト以外に別に我等の救主を探さなければならない。さらば彼を離れてペテロと同樣、我等は何處にか往き得る。イエスの神性の有無は實に神を慕ひ、罪に惱みて神の中に平安を求める我等の死活問題である。

福音書の史的價値

我等の此の疑惑を解く者は哲學ではない。理論ではない。事實如何である。理論は如何に鋭利であるも、事實に向つては木刀程の切れ味もない。そもイエスは如何なる人格を有し給ふたか。我等はまづイエスの御生涯の歷史的事實を精査することを要する。

然し乍ら、或る特定の理論を固く守る者は、事實と雖も之を事實なりと認めない。例は自然科學の立場から、世には絕對に奇蹟はあり得ないとの理論を把持する者は、イエスの行ひ給ふた數々の奇蹟を始めから否認する。まして彼自身死から甦り給ふたなど、云ふ最大の奇蹟、我等の信仰の根柢をなす此の事實を承認しない。若し世に奇蹟と云ふものは全然起り得ないものとせば、イエスの奇蹟は始めから虛僞であらねばならない。理論問題は事實問題に大なる影響を與へる。

然るに、現代科學は數十年前の夫と大に面目を異にし、科學者は甚しく謙遜となり、嘗ては頭から否定した奇蹟

の存在も、今ではかく大膽に斷言することを躊躇するやうになつた。彼等は奇蹟であるから虛僞であるとは云はない。特別の場合には特別異常の事件のあるべきことを否認しない。今では特別の場合とは何かゞ問題である。

若し特別の場合には奇蹟はあり得るとせば、我等はイエスの御生涯に數々奇蹟があつたとて、之を以て彼の生涯の傳記は虛僞であると斷定出來ない。虛心坦懷に之を研究し、その中に現はれた彼の人格を探るべきである。

イエスの御生涯の事實を我等に提供するものは新約聖書、殊に四福音書である。此の四福音書に書かれたイエスの美はしい教、彼の類ひ稀れな行動の大部分は病者を癒し、自然を克服した彼の奇蹟に關連して居る。故に若し奇蹟を始めから虛僞とせば、イエスの生涯は全く藻抜けの殼となり終るのである。爰に於てか、イエスの實相を知らんとして、四福音書の本文の記事は果して事實を報道したものなりや否や、其の批評が重要となり來る。

私は爰に聖書本文の高等批評を論じない。只現今の聖書學者の大多數の間に一致した結論を略叙しやうとする。

四福音書、即ちマタイ傳、マルコ傳、ルカ傳、及びヨハネ傳中、その最後の第四福音書は他の三福音書に對立し、特異點甚だ多く、之に反し、最初の三福音書は共通點が甚だ多い事は何人も直ちに認め得るところである。此の三福音書は此の故に之を共觀福音書、即ち同じ觀點より觀たるイエス傳と稱せられる。

共觀福音書中、マルコ傳が最も早く書かれた。而してマタイ傳及びルカ傳は此の書に他の材料を附加したものである。而してその材料は、多分使徒マタイが編輯したのであらうと推定せられるロギア、即ち「イエス語錄」であるらしい。之を現代の聖書學者がQ（獨逸語Quelle淵源の頭字）と名づける。此のQをマタイ傳の筆者と醫師ルカとが各己が目的に適ふやう、適宜に取捨選擇してマ傳ルコ傳に附加したものがマタイ及びルカ傳である。

此の外にルカ傳には、イエスがガリラヤからエルサレムに行く途中の記事に付、ルカ傳獨特のものが挿入してある。即ち、エバルトの云ふイエスの「旅行記」がそれ

である。之がイエス傳の第三の淵源となる。

マルコ傳を讀む興味は、ガービー博士が云ふやうに、弟子たちが次第にイエスを救主と認めるやうになつた其の經路と、然かも彼等が一度イエスを彼等の多年期待したる救主なりと認め、之を表白した以後、彼等の思つた救主の觀念がイエス御自身の夫とどの位相違があり、彼等は遂にイエスの地上の御生涯中、そこまで到達し得なかつたと云ふ、師弟間の懸隔を知るに在る。

マタイ傳の主眼とするところは、基督教はユダヤ教に優る、完全なる、且つ新らしい教、即ち成就せられた律法であるとの提唱である。

ルカ傳の目的は、世の貧しき者、惱める者に對する恩惠、慰めの福音を示すに在る。かくマタイ傳及びルカ傳はその目的の相違からして、マルコ傳及びQの取捨選擇さてはその配置の順序を異にする。マタイ傳はイエスの教は出來るだけ之を一纏めにしやうとし、ルカ傳は大體時の順序に從ひ、歴史的に之を配置した。

此の三つの共觀福音書の史的價値は、今では聖書學者の間に確定せられ、殆ど全部を事實として信じて差支なしとせられるに至つた。嘗てシュミーデルが「イエスの眞に科學的なる傳記の基本柱」と呼び、(一)イエスが母及び兄弟から狂氣したと云はれ給ひしこと、(二)其の日其の時を知らずと云ひ、(三)神のみ善なりとし、(四)人の子に對する罪は赦さるべしと宣言し、(五)十字架上、我が神、我が神、何故我を棄て給ひしと叫び、(六)ヨナの外に徵は與へられずと云ひ、又(七)ナザレにて大なる業を爲し得ざりし記事、(八)バプテスマのヨハネに對する答、(九)パリサイ人のパン種を愼めとの警告、以上九つを眞實信憑するに足る記事とした。何となれば、之等はイエスの生涯中彼を尊信する者に取つて最も不利な事實であり、然かも猶よく福音書中に挿入されて居るからと云つた。今日に於てはシュミーデルの此の「眞に科學的なるイエス傳の基本柱」は學者の物笑となつた。ましてドリュウス、エンゼン、ロバートソン、スミス、又此等の說に旨從せる我が國の幸德秋水等の、イエスを神話的架空の人物とする「基督抹殺論」は最早之に一顧だに與へる者はない。

第四福音書は共觀福音書と多くの點に於て觀點を異にして居る。其の記事は、(一)イエスがバプテスマを受け給ひしこと、宮潔め、ガリラヤに於ける記事、受難と復活の外は全く新らしき材料を提供し、(二)その傳道の期間は少なくとも二ケ年を越え、(三)活働の舞臺はガリラヤでなく主としてエルサレムであり、(四)その教は譬に由らず、又內容は神の國が主題でなくして、イエスが神の子なることの論議である。又(五)イエスが十字架に釘けられ給ふた日に共觀福音書と一日の相違がある。

此の書は共觀福音書を補充する目的を以て書かれたものであつて、筆者は其の書の終りに次の如く述べて居る。

この書に錄さゞる外の多くの徵を、イエス弟子たちの前にて行ひ給へり。されど此等の事を錄しは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが爲なり(二〇・三〇及三一)。

第四福音書は此の目的のために適合する材料を取捨選擇したのである。昔はその史的價値は殆ど全く疑はれたが、今日に至つては往時の如く極端でなく、此の書は(一)目擊者の記憶、(二)それに關する長年月の默想、(三)此の書の書かれた第一世紀末葉當時の哲學及び神學思想の影響の三者の有機的一體となつたものであり、其の中どれだけが目擊者の見聞した史的事實であるかは辨別困難であるが、其の中の多くの記事は共觀福音書に匹敵し、又之を訂正する程の正確なる事實と認めらるゝに至つた。

此の書の著者が何人であるかは今以て議論一致しない。古き傳統に由り、ゼベダイの子ヨハネなりとする者今尙多いが、それには多くの困難あり、彼に教へられた弟子の作とする者も亦尠くない。私にはかくする事により此の書の史的價値は毫も減少せず、却つて增加するやうに思はれる節もある。之を要するにイエスの地上の御生涯を知るには、現在その史的價値の確認を得た此の四つの福音書がある。我等は此等の書に由つて、千九百餘年の昔、ユダヤに生れ、人を教え、十字架に釘けられ、死して甦り給ひしイエスの御生涯を正確に知り得る。私は之に基いて少しく彼の人格を究やうとするのである。

二　處女降誕

この故に主みづから一つの豫兆をなんぢらに賜ふべし。視よ、をとめ孕みて子をうまん。其の名をインマヌエルと稱ふべし（イザヤ書七・一四）。

神の子イエスの地上三十餘年の救主としての御生涯は之を三つの時期に大別し得る。第一は準備期である。第二は傳道期、而して第三は十字架上の受難である。

イエスの傳道の公生涯は僅か三年に滿たなかつた。然かも此のための準備に凡そ三十年を要した。永遠の薫を放つ美はしき花の開いた期間は短くあつた。我等の生涯に於ても其の生れ來た使命は、或る時に「然り」又「否」との一言で果される。然かもそれを爲すまでには長い間の準備が要るのである。イエスの地上出現其の者が、神に於ては長い準備の後、「時滿つるに及び、神その獨子を遣し給ふた」のである。而して又降誕以來、救世の聖業成就に三十餘年の準備が要つた。神の子すらかくの如し、人はあせるに及ばない。イエスの此の時期の主要なるもの四つある。第一は處女降誕、第二は成長、第三は受洗、第四は荒野の誘惑。

イエスの出生は我等常人の出生と違つた。彼は聖靈に由り、處女の胎から生れ給ふたのである。此の事實はマタイ傳及びルカ傳に詳しい。

御使、處女の許にきたりて言ふ。「めでたし、惠まるゝ者よ、視よ、なんぢ孕りて男子を生まん、……聖靈なんぢに臨み、至高者の能力なんぢを被はん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と稱へらるべし（ルカ傳一・二八―三五）。

或る不信なる批評家は、最初から處女から子の產れる事なしと斷定し、イエスを私生子なりとする。然し乍ら聖書の記事を熟讀せよ、イエスは爾來純潔の典型として尊敬せられ、甚しきは「神の母」として崇拜讃美せられたマリヤから生れたのである。而して「正しき人」なる「ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕ならざりし」時（マタイ傳一・一八）に聖靈に由つて孕り給ふたのである。

彼等の間に不潔を想像し得るか、若し想像する者あらば、それは想像する者の心が汚穢に滿つるからである。

然し乍ら處女降誕の事實は甚だ誤解され易くある。之を喋々と何人にも吹聽すべきものではない。「其の母これらの事をことごとく心に藏め」（ルカ傳二・五〇）、イエスの生前には人々に知られず、死から甦り給ふた後、彼の女の口から親近者に之を漏し、かくてイエスを神の御子と信ずる者の間に知られるに至つたものであらう。

されば、イエスは一生涯、「人にはヨセフの子と思はれ給」ふた（ルカ三・二三）。イエスの故鄕ナザレに於てすら誰も之を知らず、イエスの敎を聞いた時驚き怪しみ、「これ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや」（マタイ傳一三・五五）と叫んだ。

多くの人は自然科學の立場から處女降誕は不可能であるとして、此の記事の史的價値を疑ふ。然し乍ら、前にも述べたやうに、世に奇蹟は絕對に生じないときめてかかる事は大なる獨斷であつて、科學者の爲すべき事でない。マタイ傳及びルカ傳の此の記事が眞實であるか否か、本文を精査することを必要とする。近時聖書批評學の發達に從ひ、ルカ傳の史的價値は大に認められ、ルカが其の序文に於て、

我らの中に成りし事の物語につき、始めより目擊者にして、御言の役者となりたる人々の我らに傳へし其のまゝを書き列ねんと、手を著けし者あまたある故に、我も凡ての事を最初より詳細に推し尋ねたれば（一・一以下）

かく詮索の結果、眞正確實と認めた此等目擊者の言を記載したのであると云つた、彼の言を眞實として承認するに至つた。ラムゼー以來、ルカ傳に載せられた處女降誕の記事の眞正も亦確立したのである。

問題の重心は、科學の立場からして一體處女から子が產れる事ありや否やではない。何故イエスは結婚に由る兩親から產れ給はず、處女の胎から產れなければならなかつたか、それである。我等は前にも云つたやうに、特別の場合には奇蹟はあり得ると信ずる。而して現代の科

學も之を否認しない。只奇蹟を信ずるには、我等の頭腦と心臟とを納得せしめる特別の理由を要求する。

聖書は之に答へて云ふ、

ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納る、事を恐るな、其の胎に宿るは聖靈によるなり。かれ子を生まん。汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり（マタイ傳一・二〇以下）。

「己が民をその罪から救ひ給ふ」ためには此の特別の奇蹟が必要であつたのである。然らば何故人をその罪から救ふためには處女降誕が必要であるか。曰く、それは罪から人を救ふ救主は何りも先づ、自ら罪なき清淨無垢の人として生れ給ふ必要があるからである。

然らば結婚に由る出生は罪であるか。アウグスチンは云つた。「子は原罪を有す、何となれば其の父母、肉慾の中に之を生めばなり」と。又「キリストには罪がなかつた。それは結婚から生れ給はなかつたからである」と。之れ明に正しくない。男女の結婚は神聖である。イエスは云ひ給ふた。

人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに造り、而して「斯る故に人は父母を離れ、その妻に合ひて、二人のもの一體となるべし」と言ひ給ひしを未だ讀まぬか。然らばはや二人にはあらず、一體なり。この故に神の合せ給ひし者は人これを離すべからず（マタイ傳一九・四以下）

結婚は神聖である。然らば神聖なる結婚により孕る事は罪ではない。

由來ユダヤ人は結婚を神聖視し、又子の產れる事を祝福した。「女は子を產むことに因りて救はるべし」（テモテ前書二・一五）とパウロは云ひ、サムエルの母ハンナは子なき故に痛く惱み、泣いて神に祈つて之を得た（サムエル前書第一章）。さればイエスの純潔、至聖、心に一點の罪を宿し給はず、神と全く一つであり給ふた事を言はんがため、殊更に處女降誕說を揑造したものでない事は明である。

思ふに、人の性格を造り上げる者は、第一に遺傳、第二に環境、第三に個性である。近來遺傳學の發達に由り、

遺傳が各人の性格に多大の影響を與へることが明になつた。人が生れ出た當座は、其の者は全部遺傳に由つて形造られて居る。赤子が漸く成長するに從ひ、環境の影響が之に加はり、之により其の性格が變化して來る。人は五歳頃までに其の者の生涯の性格の骨子が出來上ると云はれて居る。而して此の頃までに幼兒に影響を與へる環境とは兩親、殊に母である。以て母の力の大なる事を知るに足る。やがて個性が目覺めて來る。そして之が漸次其の者の性格創造の主要部を占めるやうになる。

かく人は自分が自己を自覺し、自己の意志に由つて歩む以前、遺傳及び環境の影響を受け、後から目覺める個性の行動を左右するものである。而してアダムの墮落以來、世に義人は一人だにない。各々罪の子である。彼等から生れるものは神聖なる結婚に由る男女の結合の結果であつても、皆罪の子なる兩親の罪の素質の遺傳を受けて生れ出るのである。それ故に生れ乍ら罪に對する抵抗力は薄弱であつて、罪の誘惑に罹り易く、罪に陷り易いのである。

されば神が人類を此の罪から救ひ、之を神の理想に適ふ完全强健なる人となし給ふには、まづ完全なる人を生れしめる必要がある。即ち墮落以前のアダムを再生せしめ、こゝから眞人間の生活をやり直ぼさしめ、一點の罪なき人の生涯を送らしめ、此の生命を罪に陷つた人々に注ぎ入れ給ふ必要がある。イエスの處女降誕は實に此のために必要であつた。此の特別の理由ありて、此の絶大の奇蹟があつたのであると私は思ふ。イエスは眞人として始めから罪の素質の遺傳を受けずに生れ出で給ふたのである。

然るに或る者はマタイ傳冒頭のイエスの系圖を引いて、イエスの祖先にはラハブの如き娼婦あり、ダビデはウリヤの妻たりし者と姦淫してソロモンを生んだ。イエスは此等の汚れた血を承け繼いで生れ、彼の血管にはそれが流れて居たと說く。之は明に聖書の誤讀である。

イエスの系圖はヨセフがダビデ王家の法律的後裔であり、從つて其の家の長男（多分）イエスは法律上其の嗣子である事を示したまでゞある。イエスはマリヤが未だ

此のヨセフと結婚しない以前に、此の王家の血統と何の關係があつたと思はれない處女、純潔なる處女の胎に孕り給ふたのである。

然し乍ら、人は反駁して言ふであらう。イエスには父親こそなけれ、母はあつた。片親でも親があれば、其の親の素質を遺傳されたであらうと。實にその通りである。只此の場合、注目すべき事が二つある。

その第一は、處女マリヤが孕つたのは聖靈に由つた事である。神が始めて人間を創造し給ふた時、「エホバ神、土の塵（即ち、下層動物の狀態）を以て人を造り、生氣を其の鼻にふき入れたまへり。（之に由り）人即ち生ける靈となりぬ」（創世記二・七）とある。丁度そのやうに、イエスが聖靈に由り處女マリヤの胎に孕り給ふた時、天に達すべくして、墮落して土に歸へることを餘儀なくせしめられた、人間の運命の連續が切斷され、第二のアダムが生れ出たのである。

第二はマリヤの信仰である。マリヤは己が一身に驚くべき大事件の起つた事を天使から告げられて、純潔なる處女心に驚喜すると同時に當惑を感じた。さもあるべきである。救主は必らず處女の胎から生れるとは、預言書に明白ではない。されば之を知らない心なき人々はどんな惡評を彼の女に浴せるであらうか。夫たるヨセフは「正しき人」であつた。正しき人であるだけ、如何に此の事を考へるであらうか。モーセの律法に照せば、夫なくして子を產む者は之を姦淫とした。此等の困惑が年若きマリヤを苦しめた。然かも彼の女は絕對に神の御告を疑はず、神の聖意に信賴し、斷然又決然之に服從したのである。「視よ、われは主の婢（はしため）女なり。汝の言のごとく我に成れかし」（ルカ傳一・三八）。

神の人類に對する絕大なる賜物、其の新生命は、かくして生れ出でたのである。それは聖靈に由り天より降り、絕對の信仰に由つて地が之を受け容れたのである。我等が神の子イエスの新生命を宿し奉る道も亦これと同一ではあるまいか。

されば處女降誕は眞に驚くべき奇蹟であるが、然かも必らずしも之を怪しむを要しない。然り、若し我等の如

き罪ある者が、假令それは世界屈指の大偉人であつても、それが處女の胎から生れたと云ふのであるならば、我等は之を信ずるに困難を感ずる。されど唯一の義人、否人類を其の罪から救ふ神の子が人として我等の中に生れ給ふに、聖靈に由つて、處女の胎から生れ出で給ふたと聞いて、さもあるべしと思ふのである。イエスには特別の理由があつた。それ故に此の特別の奇蹟があつた。

私はイエスの御生涯を述べやうとして、事の順序として處女降誕を最初に述べた。然し乍ら、此の事實は、イエスの御生涯、その教、其の御行動、萬人の罪を贖うためのその十字架の苦難、而して死からの復活、榮光の昇天の事實を述べた後、之を述ぶべきである。かゝる人、然り、人として古今未曾有の人、神降つて人となり給ふた人、此の事が明白となる時、誰かイエスの處女降誕の奇蹟の眞實を疑ひ得やう。

三　成長

幼兒は漸に成長して健かになり、智慧みち、かつ神の惠その上にありき（ルカ傳二・四）

昔はイエスが神の子なる證據として、彼が處女の胎から生れ出で給ふた事を擧げた。我等現代の理性は之では納得しない。寧ろ前に一言したやうに、イエスの神性が立證せられた後に、之を以て處女降誕の奇蹟を說明する事の方が、我等には理解し易い。

私はイエスは罪なき正眞の人の子として生れ出で給ふために、處女降誕が必要であつた事を述べた。彼は完全に人であり給ふた。我等と同じやうに血肉を備へ給ひ、我等と同じやうに赤ん坊から成長し給ふたのである。彼の身體が年と共に伸びゆいたばかりではなく、彼の智慧も能力も發達したのである。「われ童子の時は語ることも童子のごとく、思ふことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りて童子のことを棄てたり」

（コリント前書一三・一一）とパウロが云つたやうに、イエスにも成長があつた。

抑も神には成長發達と云ふことはない。神は永遠に完全であり給ふ。成長發達とは未だ完からざるものが完成することである。イエスは全く人であつたからこそ、成長發達があつたのである。

彼に神性があるなしに拘はらず、イエスは全知全能の神ではなかつた。彼の肉體は我等と同樣に弱くして、勞れ、飢え、渴き給ふた（ヨハネ傳四・六以下）。彼の情性は物に動かされ易く、人々の困窮、苦惱、悲痛を見て憐憫に堪えず（マカ傳一・四一、六・三四等）、その不信と罪惡とを見ては激怒し（三・五）、「預言者たちを殺し、遣はされたる人々を石にて擊つ」エルサレムを下瞰しては、之がために嘆じ（マタイ傳二三・三七）、ラザロの墓畔其の姉妹の悲痛を見て、「心を傷め悲しみ」、「涙をながし給ふ」た（ヨハネ傳一一・三三及三五）。彼が十字架に釘けられ給ふ前夜、ゲツセマネの園に在りて「悲み迫り」（ルカ傳二二・四四）、「わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり」（マタイ傳二六・三八）と叫び給ふた。誰か十字架上イエスの如く「エホバその烈しき震怒の日に我をなやまし、われに降し給へる此の憂苦にひとしき憂苦また世にあるべきや」（エレミヤ哀歌一・一二）。彼はイザヤ書五十三章に語られたる「悲哀の人にして、なやみを知り」給ふた。

然かも悲哀の人であつたイエスは又歡喜の人であつた。春風の薰るが如く和やかであつて、婦人子供も彼に近づき得た。其の始め彼が弟子たちと偕に居たまふや、新郎がその友だちと偕に在る如き喜があつた（マルコ傳二・一九）。彼は「聖靈に由り喜こび（ルカ傳一〇・二一）給ふた。實にイエスは「その前に置かれたる歡喜のために、恥をも厭はずして十字架をしのび」（ヘブル書一二・二）給ふたのである。

かくイエスは情に動かされた。イエスの智識も亦全知ではなかつた。彼の醫學に關する智識は大體に於て當時の科學智識を踏襲し、聖書に關する知識は當時の傳統的知識を採用し給ふた。律法は悉くモーセから傳はり、詩

篇は殆ど皆ダビデの作と思ひ給ふたやうである。彼は全知でなく、「その日その時を知る者なし、天にある使者たちも知らず、子も知らず」（マルコ傳一三・三二）と云ひ給ふた。彼は最初から十字架の死を目標として進み給ふた。然かも實際其の死を經驗して、其の暗黑、悽慘、苦惱の如何に大なるかに驚き給はなかつたならば、決して彼の口から「わが神、わが神、なんぢ我を見棄て給ひし」（マルコ傳一五・三四）との深刻極はまりない叫は出なかつたであらう。

情性に於て我等の如く人であり、知識に於て我等の如く限りあるイエスは、意志に於ても全能でなく、彼は度度誘惑を感じ給ふた。此の事は後詳しく述べる。彼は心中かく度々誘惑を感じ給ひたればこそ、父なる神に對して己の不完全を深く知り給ひ、青年の問に答へて、「なにゆゑ我を善しと云ふか。神ひとりの他に善き者なし」（マルコ一〇・一八）と云ひ給ふたのであらう。

イエスはかやうに人が不完全であるやうに不完全であり給ふた。然かも彼は此の不完全から、「受けし所の苦難によりて從順を學び、かつ全うせられ」給ふたのである。而して、かくせられ「たれば、凡て己に順ふ者のために永遠の救の原となり」（ヘブル書五・八）給ふた。イエスは幼兒から成長し、救主としては不完全から完全になり、我等の完全なる救主となり給ふたのである。

然し乍ら、救主として不完全から完全にまで成長發達を遂げることは、罪から救はれて潔き者となる事とは全く別のことである。不完全とは罪ある事ではない。やがて時來れば完全になり得る最初の狀態である。幼兒は大人の狀態から見て不完全である。然し乍ら、英國の最年少宰相ピットが云つたやうに、「若年は罪ではない」。

厭はしき事は不完全ではない、罪である。幼稚なる狀態から次第に成長發達し、未だ完成せられない有樣から完成せられる道程に横はつて、此の進路を沮止し、轉落せしめ、遂に破滅に終らしめる罪である。神の御意に背反する人間の病的意志がそれである。我等の衷心には此の罪が内在する。若し此の罪が赦され、罪あるに拘はらず、神の救の御力が我等に及び。我等の罪を排除し、之

から救ひ出されねば、我等の靈魂も身體も成長發達して人として完全となる事は出來ない。

然るにイエスは始めから罪がなかつた。故に彼は神が彼に豫期し給ふたやうに、「幼兒は成長して健かになり、智慧みち、かつ神の惠その上に在りき」（ルカ傳二・四〇）又「イエス智慧も身のたけも彌增り、神と人とにますます愛せられ給ふ」（ルカ傳二・五二）たのである。是イエスが人として模範的成長をなした事を云ふのである。

前に述べたやうに、幼時から青年期に亘り、人の性格に最も影響を及ぼすものは、遺傳に次で環境であり、後ち個性の目覺めである。而して幼時最も大なる影響を與へる環境は家庭である。即ち第一に兩親。次で兄弟である。更に交友、隣人、讀書、周圍の山河等が影響する。

イエスの家庭は敬虔、淸潔にして愛と義とに由つて造られたものであつた。其の母マリヤの純潔、マリヤの夫ヨセフが「正しき人」であつたことは前に述べた。其の家は落魂したとは云へ、ダビデの後裔として認められ、由緒正しく、人々に尊敬された家柄であつた。此の一家が代々、ダビデの裔から現はれると預言されたメシヤの出現とそれに由つて「イスラエルの慰められんことを待ち望」（ルカ傳二・二五）み、それを一家の根本精神としたことも亦想像せられる。

我等が善き祖先を有つことを光榮とし、其の名を恥かしめまいとする事は善き事である。我等自身子孫の前に善き祖先たる事は更らに善き事である。若し夫れ、子孫をして一家の光榮たる過去の回顧に生かしめず、將來の大希望の出現に生かしめるならば、それは最上である。イエスの家庭は此の意味に於て理想的聖家庭であつた。

イエスは此の家庭にて「健かになり、智慧みち、かつ神の惠その上にあつた」。聖書にては人は肉體、心及び靈の三者から成るものとする（テサロニケ前書五・二三）。「健か」とは身體の成長發達である。「智慧みち」とは心の發達を云ひ、「神の惠その上にあり」とは、その靈性の發達を云ふ。即ち、全人が圓滿に發達を遂げ給ふたことを指すのである。

人の性格形成の第三の、而して最も根本的要素である

個性の覺醒は、イエスに在つては、十二歳の時父母につれられて始めてエルサレムに上り、宮に詣うで給ふた時に明白に其の特異を認め得た。後年「盜賊の家」と罵り給ふた宮は、此の時は「父の家」と感ぜられ、イエスは己が眞の家に歸へり來給ふたやうな心地せられた。彼は兩親と偕にに歸鄉することさえ忘れ、獨り殘つて「教師のなかに座し、かつ聽き、かつ問ひ」、時の經過を知らず、「聞く者は皆その聰明と答とを怪しむ」だ。

一日路を經て兩親がイエスの居給はないのに氣づき、案じつゝ、都に歸へり、宮で彼を見出し、之をなじつた。其の時、イエスはかく兩親が自分を探し求めた事を却つて不思議とし、母の憂惧に答へて、「何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬか」と云ひ給ふた（以上ルカ傳二章）。

イエスは神を父と呼び給ふた。こゝに彼の深遠無比の個性の自覺があつた。彼は他の事に於ては聰明善良なる子供と云ふ外、我等と異なるところを見出し得なかつた。只此一事に於てはイエスは何人とも違つた。現代の基督者は輕ろ輕しく、神は全人類の父、我等は皆神の子であると云ふ。イエスが自ら「子」と呼び、神の「獨子」とし、「わが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神」と明瞭に區別し給ひし意味で、イエスの神の子」たる自覺を思はない。從つてイエスの此の神の子たる生命を賜りて始めて、我等も亦、イエスの父を我等の父として拜し奉り得た經驗を有たない。

イエスの靈性の發達は十二歳の時早くも此の驚くべき自覺に達して居たのである。まことにハルナックが云つたやうに、彼の人格は「彼の秘密であつて、如何なる人間の心理研究も之を測り知る事は出來ない」（基督教の本質福音と神の子の節參照）。

イエスは此の個性を有し、敬虔にして聖き家庭に育てられ、彼が少年の頃早生したと思はれるヨセフの後を嗣いで家業に從事し、一家を支え、母と弟妹とを養ひ、（或はマリヤはヨセフの後妻であつて、イエスの兄弟はヨセフの先妻の子、從つてイエスの兄姉であると云ふ者もある）、又心からなる同情を以て周圍の人々の貧窮、病苦、人々の間の憎

み、爭ひ等、其の罪惡の持ち來らす悲慘を注視し給ふた。如何に罪が人生の禍源であるかを深く悟り給ふた。

かくイエスは其の環境から學び給ふところが多かつた。然し乍ら、外から學ぶところのものは、彼が内から學び給ひしものに比ぶれば僅少である。彼は直接父なる神との交りに由る靈眼を以て、舊約聖書を精讀し、其の書の眞髓に徹し、其の中に語り給ふたイスラエルの神エホバの御言の眞意を理解したのである。彼の聖書の解釋は驚くべき獨創的であつて、當時の學者即ち聖書學者たちの、生命のない、黴臭い註解と全然異なつて居た。

イエスは預言者たちに由り傳へられた、全天全地の創造主、而して特にイスラエルの神なるエホバの存在、彼がイスラエルの民を選び、萬國民に神を知らしめんとし給ふ聖意、之がため律法を與へ、後、救世主を此の中に遣して神の國を地上に建設し給ふとの、舊約聖書の眞理を、自分自身の内約經驗に由り確信し給ふた。彼は此の聖書の預言と、自己の直接なる神との交りとに由つて、神がその出現を約束し給ふた救世主は自分自身である事を深く確信するに至つたのである。そして救世主の聖業が何であるかにつき、深く思を回らし給ふた。

イエスは舊約聖書のどの箇所から最も深く學び給ふたかは、興味ある研究題目である。彼はエルサレムを中心として萬國民を征服支配する「ダビデの子」諸王の王たる救世主の預言に興味を有し給はなかつた。其の代り、神は今の天地を一掃し、此の世界に新天新地を出現せしめるため、「人の子の、全能者の右に座し、天の雲の中に在りて來るを見ん」（マルコ傳一四・六二、及びマタイ傳二四章參照）と云へる「人の子」（ダニエル書七・一三參照）には深き感興を有し給ふたやうである。若し神がイエスを以て此の新天新地を出現せしめ給ふならば、其の大能は何處から如何にして來るか。

舊約の預言に關するイエスの獨創的理解は遂に其の奥底に達した。イエスはイザヤ書、殊に第二イザヤ書（四十章以下）に由り、神が人々を救ひ、新らしき神の國を建設し給ふには、御子の苦難に由つて之を成就し給ふと云ふ聖意を悟り給ふた。之を證據立てる主要なるものが

二つある。その第一はイエス自らの御言である。

一 ルカ傳に由ればイエスが傳道の公生涯の第一歩として、鄕里ナザレに於ける說教を載して居る。而してイエスの此の最初の說教の題目は第二イザヤ書六十一章一節及び二節であつた。イエスは其の中から殊更に「神の刑罰の日を告げしめ」の一句を省き、「主の靈われに在す、これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、我を遣して囚人に赦を得ることと、盲人に見ゆる事とを告げしめ、壓へらるゝ者を放ちて自由を與へしめ、主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり」（ルカ傳四・一八以下）と讀み、全會堂の注目の中に嚴に、「この聖書は今日なんぢの耳に成就したり」と宣言し給ふた。

二 イエスを「救世主」として世に紹介したバプテスマのヨハネが獄中に在つて疑惑を感じ、弟子を遣して「來るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」と問はしめたのに答へて、イエスは同じくイザヤ書六十一章一節及び三十五章六節を引いて、「來るべき者」は我なる事を告げしめ給ふた。

第二は四福音書全體に亘つて第二イザヤ書が深く折り込まれて居ることである。

一 イエスの受洗の時、ヨハネは「視よ、世の罪を除く神の小羊」（ヨハネ傳一・二九）と叫んだ。之れ明にイザヤ書五十三章七節の引用であつて、自ら苦難を受けて我等に平安を與へるエホバの僕のことである。

二 イエス、ヨハネのバプテスマを受けて水から上り給ふた時、天からの聲を聞き給ふた。曰く「汝はわが愛しむ子なり、我なんぢを悅ぶ」（マルコ傳一・一一）。之れ同じくイザヤ書四十二章一節のエホバの僕に對する神の御言である。

三 マタイ傳はイエスがガリラヤにて多くの病者を醫し給ふた其の有樣を叙して、『これは預言者イザヤによりて「かれは自ら我らの疾患をうけ、我らの病を負ふ」と云はれし言の成就せん爲なり』（八・一七）と、同じくイザヤ書五十三章四節の句を引用した。

四 逐次之を列擧せば其の煩に堪えない。こゝに最も顯

著なる一事を擧げば、何れの福音書も、イエスの十字架の苦難を叙するに必らずイザヤ書五十三章を引用して居る事である。(一)マタイ傳はイエスが我が來りしは多くの人の贖償(あがない)とならんためなりとの言を掲げ(二〇・二八)、(二)ヨハネ傳は民の不信につき(一二・三八)、同章一節を引き、(三)ルカ傳はイエスが捕はれ給ふ事の豫告に、(四)マルコ傳はイエスが二人の盜賊の間に釘けられ給ふたことにつき、同章十二節を引用した。(一五・二八、

改正譯にては此節はルカ傳からの轉入として削除せらる)。

抑も第二イザヤ書はエホバの僕が己が苦難の死に由つて人々の罪を贖ひ、神の民としての恩惠を受けしめる事を述べたものである、イエスはダニエル書に在るが如き新天新地の出現、神の國の建設の基礎を、イザヤ書五十三章に在るが如く、己が苦難の死に由つて据える事が、神の救主を此の世に遣し給ふた聖意であることを、此等の預言書に由つて深く學び給ふたものと私は思ふ。

四　受洗

今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく爲遂(しとげ)ぐるは當然なり(マタイ傳三・一五)。

イエスは故鄕ナザレに在つて父の家業を嗣ぎ、三十歳となり給ふた。孔子が「我十有五にして學に志し三十にして立つ」と云ひし年齡である。人として成長の頂點である。「智慧みち、かつ神の惠その上に在り」「神と人とにますます愛せられ」、且つ之を愛し給ふた。

彼の智慧は朝夕父なる神との親しき交りに由り、又聖書の靈讀に由り、且つ又困窮悲痛に惱む隣人への厚き同情に由つて益々深まつた。

(一)イエスが人の心の奥底を洞察し給ふ力は驚くばかり鋭くあつた。人々の心の念は悉く彼の靈眼にはつきりと明鏡のやうに映つた。それは冷かなる觀察に由つたのではない。人々の苦しみ、惱みを我が物とし、その罪の暗黑に嘆いて感得し給うたものであつた。何人と雖も、眞に他を愛し、己を忘れて其の者の全人格中に生き、且つ

その者の重荷を我が物とする時に得られる智慧である。我等の一切の經驗、智識は此の愛に由つて眞に生きたる智慧となるのである。

（二）イエスの先見力も亦彼の洞察力の鋭さに劣らなかつた。彼はユダヤの國の有樣、其の社會の腐敗、國民の頑迷不信の狀態を見て、國の滅亡はさ程遠い將來でない事を悟り給うた。果して其の後四十年にしてエルサレムは陷落し、民は世界に流浪するに至つた。如何に彼が眞の愛國者として己が民を其の罪の結果から救はんとし給ふたか。「あゝエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣はされたる人々を石にて擊つ者よ、牝鷄のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと爲せしこと幾度ぞや」（マタイ傳二三・三六）。

啻にユダヤ人のみではない。人と云ふ人、全人類悉く、罪のために心暗くなり、其の爲すところ的を外れ、そのために希望失せ、其の往先は只沈淪滅亡である事を見給うて、如何ばかりその悲慘に同情し給うたか。彼等を愛すること深ければ深いだけ、彼等の罪の醜惡を怒り、其の結果の悲慘を嘆じ、身自ら其の罪を荷ひ、その罪に代らんとの念願を發し給うたのである。

イエスは自分が他の人々と異なり、父なる神と特種の關係に在ることを自覺すればする程、而して神が己を此の世に遣して世の罪を救はんとし給ふ御意が明瞭になればなる程、彼は聖書を讀み、イザヤ書五十三章の「エホバの僕」の任務を以て、神が特に彼に課し給ふた救主たる務であることを確信するに至り給ふた。かくして孔子の「立つ」と云へる三十歳となり給ふたのである。

其の頃ユダヤに一偉人が現はれた。預言絶えて四百年、當時心ある人々は皆古き預言書に由つてメシヤ即ち神から遣はされ、神の大能を以てユダヤの國を救ひ、神の國を建設する者の出現を仰望して居た時であつた。彼は預言者イザヤの書に「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」とある如く、荒野にて天下に呼號し。神の國近づけりと叫び、大なる審判の日が迫り來たから、人々皆悔改めて舊惡を棄てよと警告した。彼の預言に由り、人心は異常なる衝動を受けた。

蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。さらば悔改に相應しき果を結べ……斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし（マタイ傳三・七以下）

何人と雖も今の此の罪惡漲る社會が此の儘に神の國となるとは思はない。若し地上に神の國が眞に建設せられるならば、世に横溢する不正不義は必ず清算せられ、罪を犯した者は悉く審判にかけらるべきである。過去の罪惡を償はずして、此の儘に神の國に入り、其の惠澤に浴し得べしとは考へられない。罪には何日か必らず大審判があり、其の應報がある。今それが近づいた。

身自ら嚴肅端正、寸毫の不義をも假借しない此の預言者バプテスマのヨハネの態度、彼が神の國の到來とそのための大審判の既に來れりとの窄固たる確信、更に彼の異樣の風彩は當時の人々を畏怖せしめ、反省せしめた。ヨルダン川の岸邊に我れも我れもと彼を訪ねて、その罪を告白し、彼から悔改のバプテスマを受けたのである。

而してイエスも亦、民衆に伍して彼の許に到り、彼からそれを受けやうとし給ふた。

何故イエスはヨハネのバプテスマを必要とし給ふたか。彼も亦人間の子にして、一般民衆と同樣己が罪を告白し、悔改をなす必要があつたのであるか。否、彼に毫も其の必要はなかつた。彼は少しも己と神との間に意志の疎隔、背戻を感じ給はず、罪の存在を認めなかつた。

されば罪の悔改の必要のないのに、之を受けやうとするのは僞善ではないか。否、僞惡ではあるまいか。兎に角虚僞を行ふものではあるまいか。イエスはヨハネの志と其の事業とを善とし、之に贊同の意を表するために、彼の施すバプテスマを受けやうとせられたのであるか。

そう考へる事は出來ない。事は甚だ嚴肅である。イエス自身罪あるや否や、即ち、神とイエスと其の目的相反し、其の意志に齟齬の生ずる事ありや否や、イエスに一點にても神の御意に反する事を思ひ、行ひ給ふた事があるか否か、從つて悔改の必要あるか否かに關係する。若しイエス御自身に罪あり、悔改の必要があつたならば、

爾來千九百年、基督教は虚僞の上に立てるものである。然かも亦、イエス自ら身を罪人の位置に置き給はなかつたならば、同じく我等の信仰は空しい。

ヨハネは我が前に立ち給ひし救主イエスを見て、その需を拒んだ。彼はイエスの意圖の那邊に在るかを測りかねた。

　爰にイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。ヨハネ之を止めんとして言ふ。『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給ふか』。イエス答へて言ひたまふ。『今は許せ。われら斯く正しき事をことごとく爲遂ぐるは、當然なり』。ヨハネ乃ち許せり（マイタ傳三・一三以下）。

イエスがヨハネに答へ給ひし「斯く正しき事」とは何を意味したか。原語の「凡ての義」は單數であつて、決して善い事、正しい事は何でも悉く爲遂げるとの意ではない。「義」である。此の義について、バプテスマのヨハネとイエスのそれとは越えることの出來ない、天地の差があつたのである。ヨハネはヨハネの正義觀よりしてイエスの受洗を制めた。而してイエスはイエスの正義觀からして敢て之を求め給ふたのである。

然らば**ヨハネの正義觀**は何であつたか。世の罪惡、我等各自の犯した不正不義に對しては近く大なる審判が臨むことを悟つて、神の前に己が罪を告白し、之を悔改める事であつた。それならばイエスは毫もヨハネのバプテスマを受け給ふ必要はなかつた。「蝮の裔」と痛罵されたパリサイ人こそは必要がある。何となれば、**パリサイ人の正義觀**は律法を文字通りに守ることであつて、表面上規則正しき行爲をなして居れば、之を以て神の聖前に出で神から義人と認められ、以て大審判の日にも之を免れ得ると考へたからである。それ故彼等はヨハネの勸告するやうに、自分の心の奥底に在る神に背戻する念、その犯せる罪惡を自覺して、謙遜に神にその赦を乞ふ事の必要を感じなかつたのである。

然るに、イエスが爰に「ことごとく爲遂ぐることを當然なり」と思惟し給ふた「斯く正しき事」即ち**イエスの**

正義觀は、パリサイ人の正義は勿論、ヨハネの正義以上の正義であつた。人の義でなく、「神の義」（ロマ書一・一七）であつた。律法を行ふことに由つて己を義しとすることでない。又律法に照して己が罪を認め、之を悔改める事でもない。全く神と意志、目的が一であり、一點の汚穢もなき潔き聖者が、神の聖意に服つて己れ自身罪人になり代ることである。彼等の受くべき分を自分の負擔として甘受し、そのために代つて苦しみ、死し、之に由つて神の義を不義なる者の上に與へ、罪人を神の前に義人とする、斯る義であつた。

「われらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰を受けてわれらに平安を與ふ」（イサヤ書五十三章）ところの「義しき僕」の義であつた。「その知識によりておほくの人を義とし、又かれらの不義をおはん（同五十三章一二節）それである。我等罪を自覺し、自ら之を處分する事を得ず、神の御赦なくば、神の生命を絶たれ、將來は全く暗黑であることを思ふて苦惱する者が、此の義を經ふて始めて何の憚るところなく神の前に義人と認められ、限りなき祝福を受けるに足るものとせられる義である。之がイエスの「ことごとく爲遂ぐるは當然なり」とし給ふた「正しき事」であつた。

ヨハネはイエスから此の深い意圖を啓示せられて、うやうやしくバプテスマを授けた。彼はイエスの前にはその鞋をとるにも足らないと思つた。「視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」（ヨハネ傳一・二九）と思はず彼は叫んだ。

然り、イエスが「爲遂ぐることを當然なり」と思惟し給ふた此の「正しき事」こそ、神がイエスを此の世に遣し給ふた目的であつた。永く「預言者たちにより、多くに分ち、多くの方法をもて、先祖たちに語り給ひしが、この末の世には御子によりて語り給ひ」（ヘブル書一・一）しものであつた。さればイエス、バプテスマを受けて水から上り給ひしとき、

天ひらけ、聖靈、形をなして鴿のごとく其の上に降り、かつ天より聲あり、曰く「なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悅ぶ」（ルカ傳三・二一以下、イザヤ書四二・一參照）。と云ふ御聲を聞き給ふた。

此の聖靈の降下あり、此の時イエスは始めて「神の子」の自覺に達し給ふたのではない。彼は十二歳の時、エルサレムの宮にて既に神を父と呼び給ふた。イエスが今聖靈の降下を受け給ふたのは、彼が救主として爲遂ぐる事を當然なりとし給ふた「斯く正しき事」を父なる神が悅び、嘉納し給ふたとの確信であつた。新に得給ふたものは彼の人格に關・る神性の確信でなく、彼の聖業が世の創めより定め給ふた神の御旨であつたとの確信である。

イエスの献身を父なる神が嘉納し給ひ、之に聖靈の降下ありし時、イエスは己が衷に天地萬物を己に服する異常な能力の充溢するを感じ給ふた。彼はナザレの村に生立ちし時そこで奇蹟を行ひ給ふた證據はない。今始めて其能力が與へられたのである。抑も何人と雖も聖靈を受けると、今まで氣がつかなかつた自己に潛在する能力が表はれ來り、又新に優れたる才能を賦與せられる。

或人は御靈によりて智慧の言を賜り、或人は同じ御靈によりて知識の言、或人は……信仰、或人は……病を癒す賜物、或人は異能、(コリント前書一二・八以下)。

それらに更に優れたる賜物、即ち愛。此等の聖靈の賜物は教會にて授ける洗禮に由つて與へられない。十字架に我が罪のため、我に代つて死し、死して甦り、我が生命の源となり給へるキリストを仰ぎ見て、其の意味を悟つた時之を受ける。

人は皆自己の中に特別の才能、特別の智慧の存在を自覺した時、始めて何に之を使用すべきかの問題が生ずる。己のために用ふべきか、神のために用ふべきか、はた之を用ゐず只神の聖意に己を委ね奉るべきか、今やイエスは聖靈の降下あり、神の子として萬物を己に服する大能が自己の中に充溢するを覺え給ふた。さらば世の罪の救主として之を如何にすべきか、妄に荒野の誘惑があつた。

身邊漫筆

○本號を以て本誌は創刊以來滿五年となつた。雜誌は三年續けば基礎が固まると云はれて居る。雜誌の基礎の强弱は月極讀者が全體の幾割を占めるかに由り知られる。本誌の月極讀者は全體の八割强である。私自身此の五ヶ年を顧みて善くも續いて來たと驚き怪しむ。それにつれ感謝するのは隱れたる友の援助。

○本號は特に全部を九ポイント活字とした。そして私自身全部を書いた。少しく變つた事をして見たと云ふ外他意はない。此の爲既に脫稿された由の柏木通信と小栗君の文とを來月號に廻した事は遺憾である。

○此の夏山田幸三郎君が飛んだ災難に遭はれたが大した事のなかつたのを喜んだ。事情を詳しく同君から聞いて大に同情した。知らない者は何か同君にも弱身があつたのだらうと邪推する者があらう。そうでなくとも、大きな屈辱である。同君はイエスの苦難を理解するに役立つたと云ふ。我等にはキリストの十字架位大きな慰と勵しとはない。

○一體門外漢の下馬評程厄介な者はない。其の無責任な言がどの位人の名譽を毀ち又永く友情を破壞して回復せしめないか。

○先月工學士某君が私を訪れ、教友會は教會主義、某書店は札付の先生かつぎ、此の教友會に關係し、此の書店に雜誌の賣捌を依頼する私も亦教會主義だと忠告してくれた。私は其の親切と卒直とを喜こんだ。教友會の設立については多くの人は認識不足の感がある。殊に藤本武平二君は大分誤解を受けて居る。私は爰に當時其の場處に居合した某氏が私に語つた左の直話を述べる。內村先生の無教會主義を研究する人には多少の材料とならう。

○內村先生が逝去される數日前のこと、先生はわざわざ人を遣り主治醫であつた藤本博士を招き、之に研究會の繼續を依頼された。同君は餘りに突然であるのと、事の甚だ重大であるため、逡巡して容易に引受けやうともしなかつた。先生は疊かけてやれるだらうと云はれ、先生の病體を抱いて居た藤本重太郎氏も背後から援護した。之を以て同君は已むを得ず引受けたのであるそうだ。

○若し私が同君の位置に在つたらどうしたであらう。瀕死の病人を前に飽くまでそれは無教會主義に反する（實際反しにしない）と云つて之を拒否し得たであらうか。無教會主義を唱へる人々、殊に先生の後繼者を以て擬せられる人々が同君の位置に在つたらば、どうされたであらうか。

○而して一度其の繼續を引受けた以上は、先生の逝去後、あれは病人に對する一時の氣休めであつたと云つて、恩師の依囑を反古にする事が出來るであらうか。寧ろ男らしくあらゆる非難と惡評とを浴び乍ら、約束を忠實に實行すべきではあるまいか。私が同君に同情する理由は之だ。若し夫れ、私に關する種々なる批評は默殺に限る。時が無辜に私のために說明してくれて居る。

○私は思ふ。若し今時、教會內で誰か純信仰の立場から教會覺醒のため、無教會主義を唱へる人があつたならば、私は大に其の言を敬聽する。教會を追はれた時に眞に我が友であると思ふ。無教會主義者の中で無教會主義を說くことは、教會內で教會主義を唱へると同樣何の變哲もない。福音を說いて無教會主義を唱へず、無教會主義の人々から、女郎だとか何だとか誹謗され、公的提携を中止され、絕交狀を叩きつけられてこそ、どうやらちつとばかり無教會主義らしくなるではないか。

（昭和三年二月十六日第三種郵便物認可）

昭和七年九月二十六日印刷納本
昭和七年十月一日發行　（毎月一日一回發行）

內村先生の著書

內村鑑三隨筆集　四十錢　送料四錢

「所感十年」及び「感想十年」中の粹を鑑めたもの。先生は短文に由つて人を動かされた。本書は先生のエッセンスといふべきであらう（岩波文庫）。

モーセの十誡　上製八十錢　並製五十錢　送料四錢

基督教道德を知るには、モーセの十誡を知らねばならない。モーセの十誡は現代にも生きてゐる。此の書は我等をして深く現代の病患を知らしめる。

復活と來世　六十錢　送料六錢

基督教の示す國は現世ではない。我等の生命は肉體の死を以て終らない。否死の彼方に靈魂と身體との榮光の復活があ。信者は之を望んで現世に生きて居るのである。悲しむ者に此の位大きな慰はない。

歡喜と希望　三十錢　送料二錢

何時讀んでも新鮮を感ぜしめる感想文集である

英文　余はいかに基督信徒となりしか　一圓　送料四錢

舊き日本人の心が如何にして新光明を受容れたかを語る。獨、瑞典、丁抹、等の國語に譯せられ日本人を世界に紹介した功多し。

以上聖書の眞理社にて取次ぐ。

江原萬里著

聖書的現代經濟觀

定價一圓二十錢　送料八錢

最近小葉竹氏の紹介に由り、北米西海岸で意外に多くの需要があつた。本書は日本の學生女學生には見向きもされないが、實際仕事をして自活して居る人々に訴へるところが甚だ多い。

（聖書の眞理社にて取扱ふ）

本誌舊號提供

前月號に廣告しました趣旨に由り、本誌を永く愛讀せられてゐる讀者の方にして友人に本誌を紹介して下さる方の便宜のため、本誌舊號を五部でも十部でも無代にて提供します但し番號の連續は困ります。

又中には店ざらしの爲め表紙が幾分汚れて居るものもありますから御承知下さい。若し發送先を指名されゝば、當方から御送りします。

申込先　東京市外澁谷町向山九七　聖書の眞理社

第三日曜日講義は午前十時半開始

聖書の眞理定價（送料共）

一部	二十錢
半年（六部）	一圓十錢
一年（十二部）	二圓十錢
一年半（十八部）	三圓
海外一年	二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社（振替東京六三三七五番）へ。獨立堂にてもよし。

思想と生活合本　送料不要

二三年度	第一卷	二、〇〇
四年度	第二卷	一、八〇
五年度	第三卷	二、三〇

聖書の眞理合本　送料不要

六年度　二、五〇

全四部注文の場合は六圓に割引す

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷兼發行人　江原萬里
東京市外澁谷町向山九七
發行所　聖書の眞理社
東京市神田區表猿樂町一九
印刷所　共榮堂印刷所
東京市外淀橋町柏木九四六
發賣所　獨立堂書房
振替東京一九四六八番

本誌定價二十錢